

平成 20 年 12 月 16 日

浜田市議会議長 牛尾 昭 様

議員名: 平 石 誠



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので、その結果を報告します。

### 記

(3) 期 間 平成 20 年 11 月 5 日 ～ 7 日。

(4) 視察地 大分県九重町議会 11 月 5 日(水)午後 3 時 00 分～5 時 00 分  
・観光行政について  
宮崎県宮崎市議会 11 月 6 日(木)午後 3 時 00 分～5 時 00 分  
・地域コミュニティ税の導入について

### 3、参加議員氏名

中村建



・

田村友行



川神裕司



・

道下文男



平石 誠



・

4、精算額 一人当たり 11,000 円

### 5、調査活動の概要

別紙視察報告書のとおり

別紙視察報告書のとおり

# 視察報告書

2008年11月5日～7日

新生会 中村 建二 田村 友行 川神 裕司  
道下 文男 平石 誠

会派視察として新生会5名で大分県玖珠郡九重町、宮崎県宮崎市を訪問した。  
以下、訪問各市、町についてそれぞれ報告する。

## 九重町

11月5日訪問。

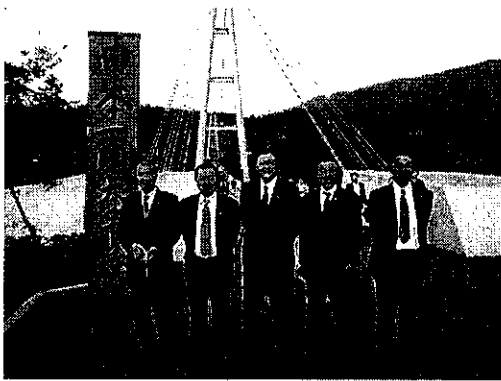
九重町は、大分県南西部に位置しており、面積は271.41km<sup>2</sup>で人口約1万1千人の町である。町の中央部には筑後川の上流玖珠川東西に走り、西側に田畑、山林が開け、東南方には中岳、久住山、大船山等10有余の九州の屋根というべき名峰連なる九重山群に囲まれている。耕地は、主に玖珠川沿いの流域と山麓の斜面地の標高350m～1000mの間に階段状に散在し、大部分は山林・原野に覆われ、気温は寒暖の差が大きく、東北から九州を内包した気象条件ということである。

町の観光資源は、九州の屋根ともいわれる九重連山、九州きっての高原美で知られる飯田高原、九酔溪、竜門の滝、震動の滝などの溪谷・名瀑や宝泉寺、筋湯、長者原などの九重“夢”温泉郷があり、日本一の発電量を誇る地熱発電所など豊富な観光資源に恵まれている。しかし、これらの観光資源は相互の連携に乏しく、受け入れ体制が十分に整備されていないことを背景に通過型の観光に留まっており、年間600万人の観光入込み客に対し、宿泊客は50万人台と非常に少ないものとなっている。



大吊橋から九重連山を望む

今回の視察は、公金を投じて建設した施設の管理・運営が全国的に苦勞されている状況のなか、九重町で建設された、日本一の吊橋「九重“夢”大吊橋」が町財政の負担になるどころか、観光客が大幅に増加し財源確保につながっているとの情報を入手したことから、浜田市も西は津和野・萩、東は石見銀山・出雲大社に挟まれ、どちらかというとも九重町と同様に通過型の観光地であり、何か参考にできることはないかと訪問する事とした。



同町の宿泊施設の年間稼働率は32.5%と低く、特に冬季の落ち込みが激しいものとなっており、九重町第2次総合計画（平成4年度策定）において、町内の資源をいかした滞在型、通年型の観光リゾートづくりを推進するため、「九重町観光振興計画書」を策定することが決定され、翌年「九重町慣行振興計画」が策定されました。

その中で、中心的テーマを三つの柱：「大吊橋」「スキー場」「リゾート施設」からなる『観光の再生・創造』と位置づけ、それらを取りまく全体基本方針を「美しく、豊かな自然との共生」とし、実現に向けて取り組まれました。三つの柱のうち、「スキー場」においては、平成8年に民間主導で完成、平成20年には13シーズン目を迎え、名実ともに九州一のスキー場となり、年間入場者が8万人を超え、課題となっていた冬季にかけての観光客誘致が図られた。

「大吊橋」整備については、平成10年から行動が開始され、平成12年には、鳴子川溪谷及び周辺整備計画が策定され、調査・測量・設計へと進み、平成15年から工事着手となり、平成18年10月30日に全事業が完成し、オープンに至った。

これまでの成果として、町財源の確保が大きく、平成19年度決算額で、使用料収入約9億7千6百万円となっている。ほかにも、雇用の拡大（吊橋関連で約100名）、地元製品の販売促進、地元観光業者への経済効果、地元住民の遊休地活用（有料駐車場等）、町民への還元（幼児から中学生までの医療費全額助成）等が挙げられる。

今後の課題として、交通渋滞対策、設備整備、周辺に湯布院、黒川温泉、阿蘇が隣接しているため、滞在型観光の定着、町製品の開発等が挙げられる。

いずれにせよ、約20億の施設が2年間の使用料収入で償還できてしまうといったことに、驚きと賞賛の念を覚えるところであったが、現実には起きていることも認識し、何事もやればできる、知恵を絞ればいいものができるという気持ちで、今後の浜田市政に少しでも役立てていきたい。

#### （九重“夢”大吊橋データ）

構造：人道専用吊橋

長さ：390m 高さ：173m 橋の標高：777m

歩道部分の幅員：1.5m 主塔の高さ：43m

（ギネス世界記録へ申請中）

建設費：約20億（周辺整備含む）

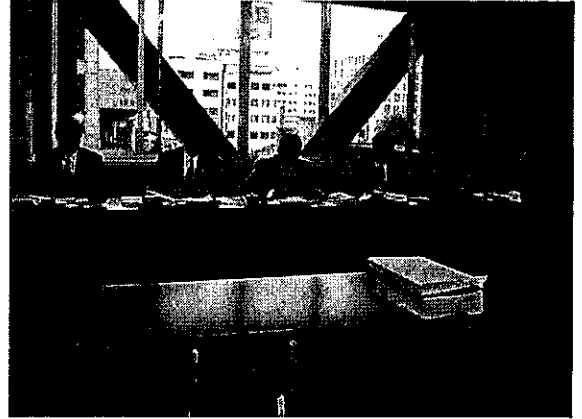
入場者数：平成18年10月オープンから平成20年11月まで

400万人達成（一日の入場者数の最高 18,347人）

## 宮崎市

11月6日訪問。

宮崎市は、九州南東部に位置し、地形は北部から西部にかけて丘陵地が連なり、南部は鰐塚山系、双石山系の山地で占められている。市内の北端には一ツ瀬川が、中央部には大淀川、清武川、加江田川などが東流し、広大な宮崎平野を形成して日向灘に注ぎ、東部の海岸は白砂青松の砂浜が続いており、市南部に位置する青島以南は、山地が海岸まで迫り、複雑な海岸線を呈している。



平成の大合併で、平成18年1月1日に近隣の佐土原、田野、高岡の3町を編入合併し、人口約37万人、面積596.80平方キロメートルの県都として、新たなスタートを切った。

当市は日向神話の舞台として、多くの神話伝承地を抱え、昭和40年12月「日本のふるさと観光文化都市」を宣言され、また昭和41年2月11日には、この歴史につながる縁によって、檜原市と姉妹都市の盟約を結んでいる。また、当市は温暖な気候に恵まれ、「太陽と緑」に象徴される国際観光リゾート都市として発展しており、平成4年5月25日にはアメリカ合衆国バージニアビーチ市と姉妹都市に、平成16年5月16日には中華人民共和国葫蘆島市と友好都市の締結を行なっている。

この間、平成10年4月1日には、政令指定都市に次ぐ事務権限をもつ中核市に移行し、なお、一層市民に密着した市政を目指し、九州の中核都市にふさわしい特色あるまちづくりを進めている。

今回の視察は、宮崎市で来年度から施行される「地域コミュニティ税」導入について、浜田市のまちづくりに参考になればとの思いで訪問したところである。

「地域コミュニティ税」導入の背景には、少子高齢化、核家族化が急速に進む中、地域の連帯感が希薄になるとともに、地域が抱える課題は多様化し、個々の団体だけで課題を解決することが難しくなっており、また、各種地縁団体の加入者数は減少の一途をたどり、市全体の自治会加入率は、この10年で11%下がって約64%になるなど、地域の自治機能は低下傾向にあり、これまでのやり方では十分な効果をあげることが出来ない状況となってきた。

一方で、近年、NPOなどのテーマ型の市民活動団体の専門性を生かしたまちづくりが活発になってきており、地域コミュニティにおける市民活動団体の存在意義も高まってきている。そこで当市では、住民主体のまちづくりを進めるために、個々の地域団体よりも広範囲な地域を単位とした地域自治区(地域協議会)を旧宮崎市域に15地区、また、旧3町域に3つの合併特例区(合併特例区協議会)を設置された。

地域自治区や合併特例区を単位とした広い地域であれば、各種分野に精通している方など、様々な方が協力して地域住民自らが地域の課題解決に取り組めると考えている。

しかし、課題の解決には財源が必要であり、そこで、住民自治の観点から、その活動費の一部を広く市民に求める「地域コミュニティ税」を創設することになったそうである。

浜田市においては、地域のつながりは宮崎市ほど希薄にはなっていないように思われるが、その一方少子高齢化による人口減少に伴い中山間地域では限界集落が増加していく傾向にあるため、こういった「地域コミュニティ税」導入など新たな対策を実施する必要性が生じてくることを考えると、大いに参考になった視察であった。

#### 【地域コミュニティ税の概要】

##### 1. 税 額

年額 一人当たり 500 円(税込規模 約 8,000 万円)

##### 2. 納税対象者

個人で市民税均等割が課税されているもの(約 37 万市民のうち約 16 万人)

##### 3. 税 の 使 途

地域自治区・合併特例区で取り組む地域の課題解決のための活動  
(地域の防犯・防災、地域福祉、環境、地域再生等の活動)

##### 4. 交 付 団 体

地域まちづくり推進委員会  
(地域協議会等の実践組織で、原則的に各地域自治区等に 1 団体)

##### 5. 配 分 額

各地域への配分は、均等割(3割)  
と人口割(7割)を組み合わせ算出

以上、2日間の視察報告とする。

(文責 平石)

